

S3-02 やる気のでる標準化を目指して

鐘紡記念病院 麻酔集中治療部

尾崎 孝平

あるテレビ番組で、盲導犬と人間を訓練するのはどちらが難しいかという会話があった。忠実な犬はいつもこちらを向いているが、ひとはいつもこちらを向いているとは限らない。若者を指導するには、夢を叶えようとする彼らの炎を燃やし続けなければならないならず、多くの企業が若者の早期離職を減らす取り組みを始めている。研修医たちに尋ねても、放置されることが最悪であるという。彼らの炎を燃やし続けるためには、情熱を注ぐ、杯を酌み交すなどいろいろな方法があると思うが、いずれも包容力が必要なマニュアルのないアプローチが求められ、標準化することはその主旨にそぐわない。

わが国の教育指導要綱の問題点と同じく、人工呼吸の内容を標準化することで果たして安全が確保されるのであろうか。教育現場では考える力を育成する取り組みが注目を集めている。人工呼吸においても問題点を自分で見つけ出す能力を指導する必要があるように感じる。さらに人工呼吸の品質を維持するは、人工呼吸の知識や技術だけでは不十分で、呼吸療法全体および全身管理の能力が求められる。これらを習得し、問題点を発掘して適切に対応できるようになるには、優秀な指導者が存在してはじめて可能になる。基礎教育の現場でも優秀な教育者のもとに児童が集まる。つまり、若者たちを上手に導く指導者の存在が呼吸療法の安全対策の重要な鍵となる。呼吸療法を標準化するならば、まず指導者のレベル、とくに「教

えるという能力」を標準化し、その指導が円滑に実施できるように医学界が努力すべきであると考える。

一方、臨床現場では「炎を燃やし続ける」ために、もうひとつの重要なアプローチがある。それは危険なことを危険であると認識させること、また、そのために何が必要かを繰り返し若者に刻み込むことである。そして、もしそれができなければ、患者を窮地に陥れるだけでなく、若者たちをも不幸に陥れることを、指導者自身も胸に刻まなければならない。呼吸療法の標準化は、実施マニュアルを指導するよりも、まず「危険なことを認識させる」ことに主眼を置いて教育すべきであると考える。たとえば、事故事例について分析をしたり、医事紛争の鑑定をさせてみたりすることが効果的である。何が危険か理解されると、自ずと何が正しいか、どのような対応が適切であるかが理解できるようになる。

しかし、ある若者がICUを去るとき「どうすれば患者が良くなるか未だによく分かりませんが、どうすれば患者が亡くなるかよく分かりました」という言葉を遺した。

彼が集中治療を続けるには、何が必要だったのだろうか。継続的に安全を確保するには、優秀なスタッフが組織に定着し、よき指導者となって次の世代を育てていくことが必要であり、私たちはその環境を整える責務があると痛感する。